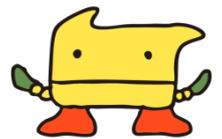


# 嬉望

第4号  
平成27年7月31日  
兵庫教育大学  
教職大学院  
学校経営コース  
大学院生編集部

「嬉望」は、本学加東キャンパスが嬉野台地区にあることと、「希望」とをかけた造語です。



ひょうちゃん  
大学マスコット

## 先輩から後輩たちへ

梅雨もあけ、ジリジリと暑い夏が到来しました。

インターンシップも目前に迫り、二年生はそれぞれ準備に慌ただしく動いています。院生を受け入れて頂く、学校、及び教育委員会の皆様には、8月中頃より八週間、大変お世話になります。何とぞ、宜しくお願ひします。

さて、今号は「先輩から後輩へ」をテーマに、先輩からの指導やメッセージについての記事を中心にまとめました。学校経営コース、そして兵庫教育大学の脈々と続く縦のつながりが感じているだけだと思います。

なお、紙面の都合で前号に載せられなかったフィードバックも併せて紹介致します。

### 先輩からのお手紙

「行政の立場になってみて」  
平成二十六年年度修了生  
高濱禎彦

早いもので、学校経営コースを修了した後に境港市教育委員会に配属になってから、三か月目を迎えようとしています。文書処理（各方面からの文書を精査し、学校へ発出する）や電話対応に追われ、一日のルーティンもつかめず、右往左往の日々でした。少し慣れてきた所で、学校現場への訪問（新入生の様子や講師の授業の参観など）や研究会の講師などの業務が入ってきました。今（6月下旬）は、議会対応（答弁書作成やその読み合わせなど）で、再び右往左往しています。

大学院での学びをまだ「直接いかせていない」ように思います。ただ、教員から教育行政の立場に、ほぼ拒絶反応なしにシフトできたのは、大学院の二年間があったからこそと思っています。

三か月余りの文書処理をするだけでも、「新教育委員会制度」「小学校の英語科と英語教育の充実」「道徳の教科化」「アクティブラーニングの推進」「コミュニケーションスキルの導入」「教育の地方分権」「学校統廃合や小中一貫教育」など、まさに二年間で学んだものが怒涛のように流れてきていることを感じます。その流れをかわすのではなく、しっかりと受け止め、取り組んでいかなければと感じています。

大学の先生方、学校経営コースの皆さん、お近くに來られる際は、できましたらお立ち寄りいただけますよう、お願いいたします。そうしていただけたら、右往左往しながら、接待させていただきます。



境港市教育委員会 学校指導課 課長補佐 高濱さん（左）

「教職大学院において学んだこと」  
平成二十五年修了生  
澄川 忠男

教職大学院時代は「学ぶことの大切さ」と「かけがえない出会い」を教えていただいた二年間でした。

私は今、教育行政の現場で働いています。大学院では学校経営について学びましたが、組織としての手のつけ所等、学校経営について指導する際に、大変役に立っています。教育行政の事についても学びました。実際に自分が施策を考えたり評価したりする際に役立つと思います。

皆さんが学ぶチャンスを与えられている二年間は、貴重な時間です。学んだことは決して裏切りません。

そして、もう一つ大きく影響を受けたのは「人との出会い」です。皆さんは、コース

の先生方のお陰で、大学院の授業やフィールドワークにおいて、日本全国の方々と出会う機会を与えられています。それだけ、院生個人の学びが広がり、深まっていくことにつながります。ありがたいことです。

今後、教育現場に戻った際に、皆さんはその人脈をしつかり活用し、それぞれの地での教育に役立てると共に、皆さんの同僚や後輩のために、人とのつながりをさらに広げてほしいと願っています。

皆さんが今後戻られる場所で、学校経営コースで学んだことが、大きく花開くことを願っています。

澄川さんは、下関市教委学校教育課教育研修室室長の立場で、平成27年4月6日～5月8日まで、6回にわたり日本ミドルリーダーという連載を持たれていました。ミドルリーダーの在り方や若手教員の人材育成について様々な視点や情報を提供され、大変好評だったようです。

### Topix



## 「開かれた学校づくりの事例と実践演習」特別講義 ゲストティーチャー くようこそ先輩

二年生の授業「開かれた学校づくりの事例と実践演習」では、先行事例研究の講師として本学大学院の先輩をお招きし、講義をしていただいています。

●平成27年5月26日（火）

武庫川女子大学  
教授 長井 勤治 先生

長井先生は平成12年3月に教育経営コースを修了されました。福井高校、槻の木高校ではそれぞれ普通科総合選択制、普通科単位制を作るなど学校の改革や立ち上げにご活躍されました。教頭・校長として勤務した高槻北高校では教員養成系コース「教志コース」を導入し、25大学から40名の教員が講義に訪れたり（教志入門）生徒一人ひとりが2校種にわたって実地実習を体験したりする（教志体験）など、他校では例を見ないカリキュラムを作り上げられました。

第一に大切なことは現状分析。その上で、教職員の意思統一を図れるだけの根拠を準備する。「子どものために何が必要か」を基本に決裁者としてぶれないこと等、新規事業に取り組み際に経営者として大切にしてきたことをたくさん事例とともに教えていただきました。

学校の特色づくりについておっしゃられた「可能性は探るのではなく、可能性を創造するんです」という言葉がとても印象的でした。

●平成27年6月23日（火）

兵庫県立須磨友が丘高等学校  
教頭 棚野 勝文 先生

棚野先生は平成21年3月に学校指導職専攻を修了されました。平成25年度には兵庫教育大学連合大学院博士課程を修了し学校教育学博士でもあります。

博士課程への進学のきっかけとなったのが、二年生が現在準備をしているインターンシップにおける校長シャドウイングだったという興味深いお話もしていただきました。現在は兵庫県立須磨友が丘高等学校で教頭として勤務していらっしやいます。現任校

での勤務は今年度からということもあり、講義は前任校である兵庫県立神戸北高等学校（二年間勤務）での実践について行われました。

遅刻・欠席状況や特別指導件数などから落ち着きのない状況が見られた生徒が様々な取組をおして落ち着きを見せていく様子を聞かせていただきました。取組は学校内だけのものではなく、神戸北高校では、地域でのボランティア活動等社会貢献活動もたくさん行われています。地域や異校種との連携によって社会に触れ、生徒は多くのことを学びます。

講義の最後に「開かれた学校づくり」は国の施策であり、所与の条件ですが、その本来の意図を考えてみませんか？という問いを与えていただきました。

「しなければいけないもの」として取組むのではなく、その文脈を理解して取り組むことの大切さを示唆していただいたと思っています。

●平成27年7月14日（火）

京都市立周山中学校  
校長 安藤 克彦 先生

安藤先生は平成21年3月に学校指導職専攻を修了されました。修了後は教頭として京都市立週山中学校に勤務され、

現在は同校で校長としてご活躍されています。

周山中学校は平成17年に京北町と京都市が合併したことから所管も京北町から京都市に変わり、伴って教員の人事等、学校組織の体制も変わる中、地域とのつながりをいねいにつくりながら学校経営を行われています。また、京都市の小中一貫教育推進の方針の下、三つの小学校と協議しながら進める小中一貫教育についても「小中一貫をつなぐのは校長」として推進に尽力されています。

院生からは、教育制度や市教委の人事システムを積極的に活用される学校経営への姿勢に対し、「制度に振り回されずに、うまく使っていくことが実質的な学校経営になることが感じられた」という感想がありました。

●平成27年7月15日（水）

北九州市子育て支援課放課後児童クラブアドバイザー  
西村 哲子 先生

西村先生は兵庫教育大学大学院生徒指導コースを修了されました。その後、中学校、教育委員会での勤務を経て、平成12年度からは中学校で校長を務められました。平成14年度からは活躍の場を小学校に移し、校長として3校の学

校運営に尽力されました。この度は、そうした貴重なご経験の中から、校長として勤務した12年間の取組についてお話を聞かせていただきました。

西村先生の経営を印象的に表す言葉が「戦略」でした。常に国の教育施策の動向に気を配り、その文脈を自校の状況と重ねてすべきことを考え、具体的な実践として教職員に提示していく様子は、院生に学校経営の魅力を伝えるものでした。

最後に先見性を磨くために西村先生が心がけておられたことを教えていただきました。常に教育行政に対してアンテナを張っておく。（特に政策転換期には積極的に研修会に参加した）「社会は変わる」ことを自覚しておくこと。協力を得たいと考えるなら、得られるだけの条件整備をしておくこと。早い段階から考えておくこと。教育に関わる者として、どのような立場にあっても共通して大事にしたことだと思えます。

「ようこそ先輩、兵庫教育大学学校系コースへ」  
修了生の皆様のご活躍を祈念しつつ、今後もそんな先輩方との出会いに期待しながら現一年生、二年生も日々精進いたします。

4名の先生方には日々御多用中にもかかわらず、私たちのためにお時間を分けていただきましたこと、心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

**〔授業紹介〕 演習発表**  
「開かれた学校づくりの事例と実践演習」

前期の授業も終わりが近づいてきました。7月28日(火)には、二年生の授業で、開かれた学校づくりの改善プランの発表会が行われました。二年生は、これからインターンシップに入り、現任校や教育行財政における改善プランを作成します。そのプランにも大きく関わってくるとも考えられる今回の発表です。発表ではグループを作成し、その中の代表5名が発表しました。

**柳井崇史教頭**

開かれた学校づくりの開くポイントを教育委員会に応用し、誰に対して何を開くのかを設定しました。その中で、情報を公開していくことと、地域住民の願いや思いを公聴していく方法を模索しました。

**小川晶弘教諭**

現任校である三田市立高平

小学校において、現時点の背景を受けて、効果的に情報を開く方法やその情報が一方通行にならないための工夫を考えました。

**吉岡美保教諭**

現任校である京丹後市立峰山小学校における改善プランを発表しました。学校もさまざまな情報を地域に開いており、地域も学校に協力的な中で、「開く」ことが目的になつてしまわないように、活動自体にフィルターをかけて、精選していく重要性を提案しました。

**古寺弘憲教諭**

現任校である姫路市立朝日中学校における改善プランを発表しました。情報を開くことが学校にどのような影響を及ぼすかを考えながら、職員の協働性を高めることも合わせてプランを作成しました。

**宮本美枝子主幹教諭**

現任校である兵庫県伊丹西高等学校において、情報を内に向けて発信する重要さと、外に向けて何を開くべきかを分析しました。改善に向けた課題意識の共通理解など、教職員組織内の取組についても言及しました。

5人の発表の後、他のメン

バーから、狙いに迫る質問や、プランをより効果的に遂行できると思われる取り組み方やコツなどの意見も飛び交いました。今日の発表が、二年生の改善プランの構想にプラスに関わることでしよう。



地域との連携の在り方（開き方）について、発表する吉岡美保教諭

**現職教師としてー**

**院生の活躍**

●「教員のための組織マネジメントB」

大野准教授が担当しているストレート院生（学部卒業生）向けの「教員のための組織マネジメントB」の授業において、学校経営コース二年生が活躍しています。

演習内容は、ケースメソッド教材に記載されている事例として課題を把握し、改善案を

まとめて発表するものです。5〜6人で構成された各グループに学校経営コースの院生1人が現職教員の立場として入り、必要な指導助言をするもので、全部で3回分の授業に入りました。

現場経験は教育実習しかないストレート院生ですが、事例校の特徴をしつかり解読し、課題をまとめていました。しかし、解決策についてはなかなか有効な案が見つからないグループが多く、そのような時に現場経験豊富な現職教員からのヒントやアドバイスを大変参考になったようでした。真剣に耳を傾けていました。

最後の発表会では、プレゼンの方法にも工夫をこらし、各グループが自信をもって自分たちの改善案について発表していました。

一連の授業における彼らの真摯な学びの姿を見て、近い将来、一緒に教育現場で仕事



担当したグループの発表を温かく見守る山下隆功教諭（右より一人目）

ができることを期待すると共に、将来有望な教員の卵であるストレート院生の力になれたことをとてもうれしく思えた3時間でした。

●「教職原論」

安藤准教授が担当している学部一年生向けの「教職原論」の授業において、学校経営コース二年生7名が現職の教師の立場で30分の講義を行いました。

各回2名ずつ、四週にわたる「教科指導」「学級経営」「生活指導」「特別活動」のテーマについて、それぞれ小学校と中学校の視点から話をしました。

まだ、教職について学び始めたばかりの、卵にもなれていない小さな教師の種たちに配慮し、分かりやすく用語の説明から入るなど、担当した院生はそれぞれ工夫しながら、それまでの自身のキャリアや実践を元に、近い将来、教師として教壇に立つために必要な知識と意識を伝えていました。

授業後の振り返りであるリファレンスカードには、「将来、教師として現場で活躍するために、自分がこれから何をすべきか、考えることができ「等の前向きな感想が多く

見られました。  
担当した院生からは、準備等も大変だったが、やって良かったという感想とともに、この種たちが大きく成長してくれることへの期待の声が聞かれました。



ゆっくりと優しい口調で、分かりやすく講義する本間厚子教諭

### 今月のフィールドワーク

#### 加東市小中一貫教育研究会

●第1回 6月10日(水)

加東市では子どもたちのよりよい教育環境づくりを目指し、小中一貫教育の推進について検討しています。現在、地域やPTA、学校関係者の代表が集まり小中一貫教育について研究しています。

本学浅野教授と大野准教授も有識者として参加しています。

●第2回 7月2日(木)

午前中に大阪府の先進校を視察し、その感想をもとに、小中一貫教育の良さや課題について話し合いました。

小中一貫教育についてそれぞれの立場から感想を出し合いました。その中で中学生の自己有用感や自尊心の醸成、中学生への憧れに基づく小学生の向上心の醸成等、子どもにとつての有効性が確認されました。その上で、この日の話し合いで時間がかけられたのは、課題の洗い出しでした。会にとつて今後の研究課題を

見つけていくという意味だけでなく、それが小中一貫教育を具体的に進めていく上で重要な観点になるからです。推進していくためには成果を出さなければなりません。委員長からは「目指す成果」を示し、教育委員会が責任もって推進していくことを市民に約束しましょうという提案がありました。それによつてすべきことが具体的になるからです。また会の終了にあたり副委員長からは、見えづらい課題を見えるようにし、全員で共有し、それを解消できるように教育システムをつくっていくことが大切だということお話がありました。

実際に小中一貫教育が始まったとき、実践の中心となる教員やそこで学ぶ子どもたちにとつてよりよい教育環境として機能するものとなるように、いねいな準備がなされています。

#### アクティブラーニング学習会

7月24日

「アクティブラーニング」

―背景と実際 協動的な学習びというものを考える―

最近よく耳にする「アクティブラーニング」。教員の一方的な講義形式の教育ではなく、「学習者の能動的な学習への参加を取り入れた教授・学習

法の総称」とされています。そのアクティブラーニングについて詳しく学ぶため、鳥取県教育センター教育企画研修課の千代西尾祐司先生を講師としてお招きした「アクティブラーニング学習会」を、学校経営コースで鳥取県出身の三浦泰子教諭(一年生)と菅生宏教諭(二年生)が企画しました。

当日は学校経営コースの院生だけでなく、他のコースからも多数の参加者があり、会場となった兵教大ライブラリーホールは、ほぼ満席となるなど、アクティブラーニングへの関心の高さがうかがえました。

学習会は、参加者が生徒役になつてアクティブラーニングの手法で課題を追求していくグループワーク(協調学習)の形式で進められました。話し合うことで課題に対する自分の考えやアイデアが友達と共有され、互いに影響されながら学んでいく過程や、一人の考えだけでは獲得しにくい概念が拡張していく過程を、実際に実感することができました。

このようにグループワークを通じて小さな納得を積み上げ、自分なりのストーリーを作っていく活動で得られた知識や考え方は次の問いを生む力となり、更に学ぼうという

意欲にもつながります。今後、教育現場で一層導入が予想されるアクティブラーニングの手法とそのメリットについて、実践的に学ぶ貴重な学習の機会となりました。



積極的に鋭い質問を投げかける菅生宏教諭

#### 嬉望編集部より―御礼

この度、二年生がインタースhipに入るため、私たちが嬉望編集部でも先輩から後輩(一年生)へ活動をパトナツチします。

昨年度8月に引き継いでから今号まで、温かいご支援、ご愛顧を賜り、本当に有難うございました。

来月号からも変わらず、「嬉望」、及び嬉望編集部を宜しくお願い致します。

平成27年7月31日

嬉望編集部 二年生  
(小西・古寺・横田・吉岡)